

## 404) 初恋人

過ぎ行く春はあてもなく 空を彷徨い流れてく  
恥じらいがちに目を伏せて 川のほとりにたたずめば  
交わす言葉は途切れても たがいに心で感じてた  
わたらせがわ  
渡良瀬川によみがえる 初恋人の面影よ

仕掛け花火にてらされて 輝るまなざし揺れていた  
ゆかた  
浴衣が似合う色白の 細いうなじが眩しくて  
思わず息を呑み込んだ 祭りの夜を思い出す  
わたらせがわ  
渡良瀬川によみがえる 初恋人の面影よ

飛び交うホテル追いかけて 日暮れの川原さまよった  
美しすぎる唇が 何かを語りかけたとき  
さえぎるように抱き合い その唇を奪ってた  
わたらせがわ  
渡良瀬川によみがえる 初恋人の面影よ

夕焼け空を惜しむよに コスモスの花咲いていた  
初めての恋はかなくて わたらせがわ  
渡良瀬川を流れてく  
別れに泣いたあの瞳 あのまなざしは今いずこ  
わたらせがわ  
渡良瀬川によみがえる 初恋人の面影よ

初めての恋もどかしく わたらせがわ  
渡良瀬川を流れてく  
わたらせがわ  
渡良瀬川に泣いていた 初恋人の面影よ